

キリストと心がつながる時

マルコ 5:25～34

今日の話のバックグラウンドを見ておきます。25節に「そこに」とありますがどんな状態であったかと言いますと会堂司でヤイロと言う人の娘が、死にかけていました。そこで、「イエス様に一刻も早く来ていただいて娘が助かるように祈ってほしい。」その強い依頼を受けてイエス・キリストがヤイロの家に向かわれるその途中に起こった出来事なのです。ですから、読んでいきますと、丁度、ヤイロの娘を助けるために駆けつけている最中に今日の話が出てきます。弟子を含め、周りの人達の関心は重篤な状態にあるヤイロの娘の事です。しかしこの福音書を書いたマルコは長血をわずらったこの女性とイエス様との間に起こった出来事が非常に重要なのでそのことを書き留めておいたのです。どうして重要なのでしょうか？そのことを考えながら今日の箇所を見てゆきましょう。

それでは、まずこの女性について見てゆきます。彼女は十二年間という長い間女性特有の病気で苦しんでいました。あとでイエス様が「娘よ」と言われたことから20代の人でしょう。29節に「病気が癒された」とありますが新改訳三版では「ひどい痛みが直った」と書いてあります。12年間も病気で辛い痛みの中をこの女性は過ごしてきたのです。さらに旧約聖書のレビ記を見ますとこの病気というのは、当時は、宗教的な意味で汚れたものだと考えられていました。宗教的な汚れというのは罪深い者であることを意味しています。それは存在を否定することであり、この女性は人格的に深く傷ついたことと思えます。朝起きる度に落ち込んでまた今日も生きていかなければならないのかと思う日の繰り返しだったことでしょう。この病気自体は彼女に何の責任もありません。ですからその理不尽さゆえに人だけでなく神様に対しても怒りが込み上げてきたのではないのでしょうか。それでも聖書にはこの人は癒されることを期待して当時良いと言われていた医者何人にも診てもらいました。しかしどの医者にかかっても直らない。むしろ、診てもらうごとにお金を取られ、すべてを使い果たして、挙句の果てにますます悪くなったというのです。自分自身に絶望し、自分のことが嫌いでたまらない。恥を忍んで医者に診てもらっても一向に良くなならない。生きていても何も良いことがないと思っていたのではないのでしょうか？

そんな女性が、噂話を耳にするのです。それは「イエスという人はどんな病気でも癒してくださる」ということでした。そこで、この人は、藁にもすがる思いで、イエス様のところに行ってみようと決心しました。人目を避けて生きてきた人でしたから会いに行こうと動き出すこと自体、勇気がいったことでしょう。それに大勢の人が主イエスを目がけて急いでいましたので道すがらいろいろな声を耳にしたことでしょう。「私も癒してほしい」「今それどころじゃない。死にかけているヤイロの娘をいやそうと急いでおられるんだから」28節で「あの方の衣にでも触れれば、私は救われる」と思っていた、とありますが元のことばは言っていたです。つまり、「イエス様に会って癒してほしい」とつぶやいたら、誰かが「そんなこと出来るわけがない。無理、無理」という声が聞こえてきた。そんな感じだったでしょう。しかし、彼女は諦めませんでした。この機会にかけたのです。それは彼女の小さくも純粋な信仰によるものでした。彼女は後ろからそっとイエス様の衣に触れた途端、たちどころに直ってしまいました。新改訳三版では「ひどい痛みが直った。」とあります。彼女は12年間に及ぶ痛みと苦しみから解放されたのです。どんなに嬉しかったことかと思えます。そして彼女はそっとその場を立ち去ろうとした時、そうは問屋が卸さない事態となってしまいました。

実はこの話はここからが、大切なのです。そこから何が起こったかと言いますと「イエスも、自分のうちから力が出て行ったことにすぐ気がつき、群衆の中で振り向いて言われた。『だれがわたしの衣にさわったのですか。』」イエス様は触った人を知ろうと探し始められたのです。そのことに対して弟子達は、

「ご覧のとおり、群衆があなたに押し迫っています。それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」と言いました。弟子たちのことばは至極当然でした。イエス様は多くの群衆に取り囲まれ、押されるようにしながら歩いているのです。そんな中で誰が触ったなど分かるわけがありません。さらに言うなら「誰が触ったか分かったからといってそれが何になるんですか。今はヤイロの娘を救うために一刻を争っているのではないですか？」そういったことを弟子たちはいったのです。私もそこにいる一人なら同じことを言ったと思います。しかし、イエス様はそのような声に耳を貸すことなく「誰がわたしに触ったのか」と言われ、触った人が自分のところに名乗り出ることを待っておられたのです。この女性の立場に立って考えると今起きていることは想定外のことであり、イエス様が探し続けられること自体、不安な気持ちがどんどんと大きくなっていったのではないのでしょうか。そして彼女はもうその場を立ち去ることが出来なくなりイエス様にすべてを打ち明けたのです。

ここで考えたいのですが彼女はイエス様のところに出てゆく時、「恐れおののきながら進み出て」ゆきました。原文では「恐怖で打ち震えながら」ということで本当に怖かったのです。しかし、どうしてこの女性はそんなにイエスの前に出ることが怖かったのでしょうか？ 実は私達は初めて人物を判断する時に、自分の過去の経験から判断します。これには肯定的な反応もあれば、否定的な反応もあります。そしてこの女性が過去に体験したことは徹底した人間不信でした。人から心傷つく言葉を言われたり、効きもしない薬を買わされたり、どなりつけられたり何とも良い経験をしていないのです。ですからここでイエス・キリストが「誰が触ったのか？」と重ねて問われることは、この女性にしてみれば何を言われるのか、どんな罰がまっているのかそのことで不安になってしまったということです。不安な感情が引き出されてしまったのです。でも、絶対に見つかってしまうということが分かった時に、彼女はどうかというと、イエス様の前にひれ伏して、イエス様に真実を全て打ち明けたのです。「ひれ伏す」というのはまさに礼拝を意味することばであり、自分のことを嘘偽りなく、ありのままに語ったということです。つまり何か自己弁明や言い訳をするわけではなく、何を言われても受け入れますという姿勢です。するとイエス様からこの女性へ「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」という言葉がかけられました。一気に彼女の心が平安に満たされたのです。最初の衣に触れたのも信仰なら、イエス様の前に恐れおののきながらも正直に出るということも信仰です。

さいごに何故イエス様は彼女を癒された後、家に戻されなかったのでしょうか？ 弟子たちが「こんなに人がいるのに誰がさわったのか分かるわけないじゃないですか。それにそんなことをしている場合ではありません。」と言いましたがその通りですよ。しかし、イエス様がこの女性をそのままでは行かせませんでした。何故でしょうか？ それは、もし、この女性が、このまま帰ってしまったら、この女性は、この後の人生、孤独のままだからです。癒された後にイエス様の前に出ること自体、恐怖だったわけですから、黙って帰るとその後、イエス様と顔を合わせないで生きるようになります。そして今は身体の病気が治って良かった良かったと思っていますがやがて次の問題、家族のこと、仕事のこと、その他、様々な問題が起こります。それらに対して、この癒されたという一回の経験だけでは殆ど力になりません。またたとえ病気なんか治っても、孤独だったら何もいいことはありません。イエス様は無理にでも、この女性を、自分と皆の前に、出したかったのです。それはこの女性をいじめるためではありません。むしろイエス・キリストというお方は「自分のすべて、それには醜い面や弱い面もありますがそれらをさらけ出しても、顔をそむけないで、大丈夫だよ、元気でまた何かあったらいつでもおいで」と言ってくれる人

であることを知ってもらうため、体験させるためなのです。この時、キリストの心とこの女性はつながったのです。イエス様の前にひれ伏して真実を言うこの女性を見て、もっと距離を取ろうとする人はいたことと思います。しかし、この女性はキリストと心がつながることによってどこでも前向きに生きてゆくことが出来るようになりました。

さてキリストと心がつながらないで信仰生活を送ることは本当にもったいないことだと思います。聖書は本当の平安を得たいと思うなら「光の子どもとして歩みなさい」エペソ 5:8 と言います。神の前に出るということは光に照らされることです。光が当てられると様々なものが明らかになるのでそれは怖いことでもあるでしょう。しかし、本当に、皆さんが、自分の心の中に、苦しみや、また、恥ずかしい思いや、憎しみや敵意などいろいろなものを持っていることに気づいているとしたら皆さんは、良い出発点に来たと思います。イエス様は、皆さんが、その苦しみや、その悲しみや、その恥ずかしさを、光の中に出すのを待っておられると思うのです。自分の人生を振り返って、「隠して来たなあ。」と思われる方は、イエス様の前に、それを公にしてみてもどうでしょうか。イエス様の前に、そして、光の中に、それを出してみてもどうでしょうか。その時、キリストは「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」と言われるに違いありません。キリストは「誰が私の衣に触れたのか？」と言われます。つまりありのままの姿で光である私のもとに来なさいと呼びかけておられます。その周りをぐるぐる廻っていても本当の平安は来ません。今がキリストと心がつながる時ではないでしょうか？ 祈ります。